

京都市市民参加推進フォーラム第42回会議 次第

日時：平成26年1月22日(水)

午前10時～正午

場所：職員会館かもがわ 大多目的室

1 開 会

2 座長挨拶

3 議 題

- (1) 協働の日（仮称）検討部会の進め方について
- (2) 協働のルール（仮称）検討部会の進め方について
- (3) 市民参加円卓会議の開催について
- (4) 市民公募委員サロンの運営について
- (5) その他

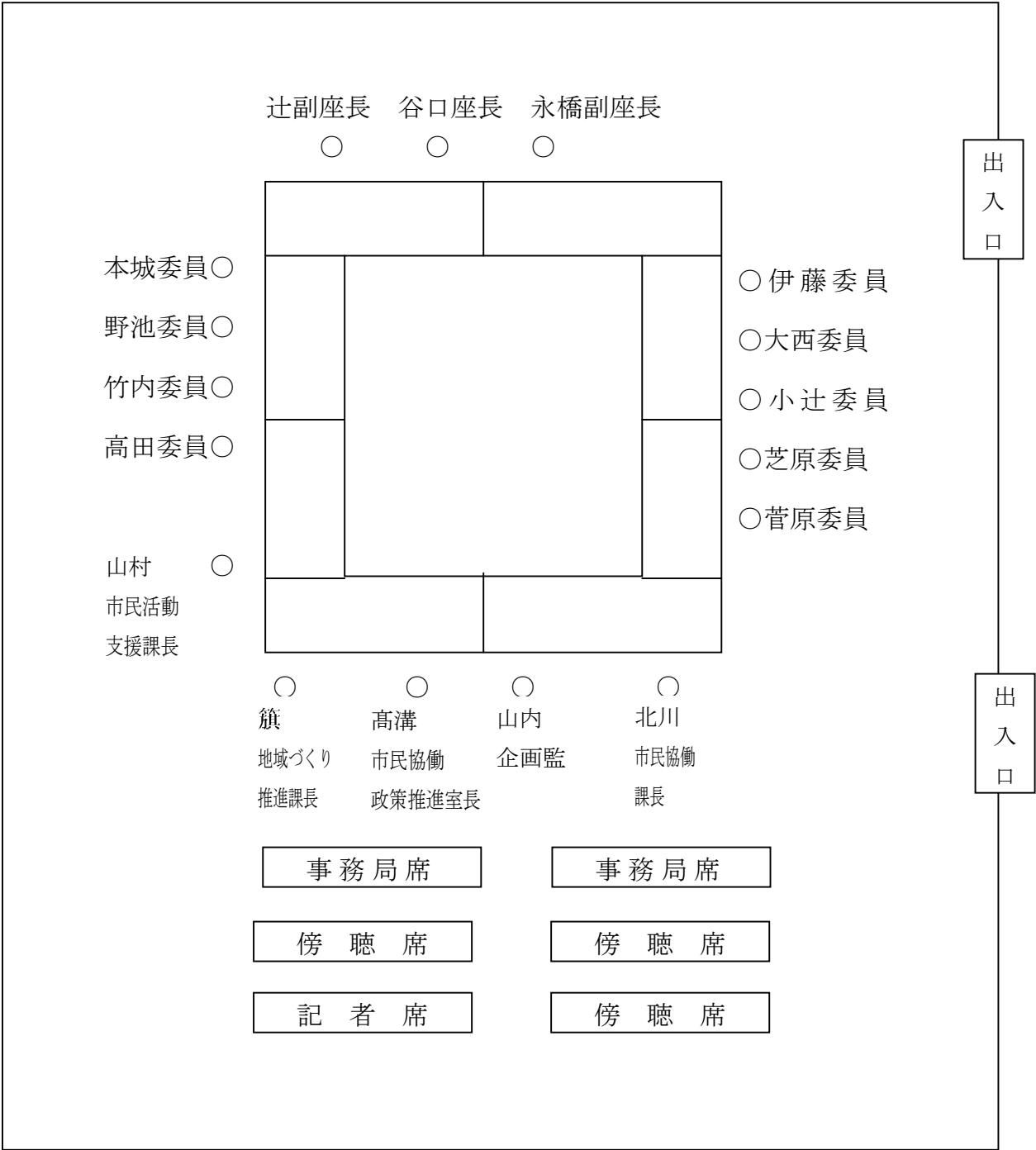
4 閉 会

【配布資料】

- 資料1 配席図
- 資料2 京都市市民参加推進フォーラム委員名簿
- 資料3 京都市市民参加推進条例，京都市市民参加推進条例施行規則（抄）
- 資料4 第41回京都市市民参加推進フォーラム 摘録
- 資料5 第5回協働の日（仮称）検討部会 摘録案
- 資料6－1 第5回協働のルール（仮称）検討部会摘録案（抜粋）
- 資料6－2 第5回協働のルール（仮称）部会 模造紙まとめ
- 資料7 各部会の進捗状況について
- 資料8 市民参加円卓会議について
- 資料9 市民公募委員サロンについて
- 資料10 新たに設置された審議会に係る「審議会情報シート」について

配 席 図

平成 2 6 年 1 月 2 2 日（水）
職員会館かもがわ 3 階 大多目的室



京都市市民参加推進フォーラム委員名簿

平成 2 6 年 1 月 1 日時点

氏 名	職 業 等	就任年月日
伊藤 省二	市民公募委員	2 4 年 4 月
大西 賢市	有栖川を考える会会長	2 0 年 4 月
大室 悦賀	京都産業大学経営学部准教授	2 1 年 4 月
小辻 寿規	市民公募委員	2 5 年 4 月
芝原 浩美	N P O 法人ユースビジョン事務局長	2 3 年 1 1 月
菅原 敬子	市民公募委員	2 4 年 4 月
高田 敏司	京都新聞社論説委員	2 5 年 1 0 月
竹内 香織	N P O 法人京都子どもセンター理事長	2 4 年 4 月
◎谷口 知弘	コミュニティデザイン研究室 代表 同志社大学大学院総合政策科学研究科 客員教授	2 1 年 4 月
○辻 由希	京都大学大学院法学研究科准教授	2 4 年 4 月
○永橋 爲介	立命館大学産業社会学部准教授	2 2 年 4 月
西野 桂子	N P O 法人「音の風」代表理事	2 0 年 4 月
野池 雅人	きょうと N P O センター事務局長	2 5 年 1 1 月
本城 武子	市民公募委員	2 5 年 4 月
村上 龍	京都青年会議所副理事長	2 6 年 1 月

※ ◎座長, ○副座長

(敬称略・5 0 音順)

京都市市民参加推進条例(抄)

(フォーラム)

第 1 1 条 市民参加の推進に関する事項について、市長の諮問に応じ、調査し、及び審議するとともに、当該事項について市長に対し、意見を述べるため、京都市市民参加推進フォーラム（以下「フォーラム」という。）を置く。

(フォーラムの組織)

第 1 2 条 フォーラムは、委員 1 5 人以内をもって組織する。

2 委員は、公募により選任された者、学識経験のある者その他市長が適当と認める者のうちから、市長が委嘱し、又は任命する。

(委員の任期)

第 1 3 条 委員の任期は、2 年とする。

2 公募により選任された者を除き、委員は、再任されることができる。

京都市市民参加推進条例施行規則(抄)

(フォーラムの座長及び副座長)

第 9 条 京都市市民参加推進フォーラム（以下「フォーラム」という。）に座長及び副座長を置く。

2 座長は委員の互選により定め、副座長は委員のうちから座長が指名する。

3 座長は、フォーラムを代表し、会務を総理する。

4 副座長は、座長を補佐し、座長に事故があるときは、その職務を代理する。

5 座長及び副座長に事故があるときは、あらかじめ座長の指名する委員がその職務を代理する。

(フォーラムの招集及び議事)

第 1 0 条 フォーラムは、座長が招集する。ただし、座長及びその職務を代理する者が在任しないときのフォーラムは、市長が招集する。

2 座長は、会議の議長となる。

3 フォーラムは、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができない。

4 フォーラムの議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

5 フォーラムは、必要があると認めるときは、委員以外の者に対して、意見の陳述、説明その他必要な協力を求めることができる。

(フォーラムの庶務)

第 1 1 条 フォーラムの庶務は、総合企画局で行う。

(フォーラムに関する補則)

第 1 2 条 この規則に定めるもののほか、フォーラムの運営に関し必要な事項は、座長が定める。

第 4 1 回 市民参加推進フォーラム会議 摘録案

- 1 日 時 平成 2 5 年 1 1 月 7 日（木）午後 6 時 3 0 分～午後 8 時 3 0 分
- 2 場 所 こどもみらい館 4 階 第 2 研修室
- 3 参加者 市民参加推進フォーラム委員 1 2 名（伊藤委員，大西委員，菅原委員，小辻委員，芝原委員，高田委員，谷口委員，辻委員，永橋委員，西野委員，野池委員，本城委員）
- 4 傍聴者 1 名
- 5 特記事項 動画共有サイト U s t r e a m（ユーストリーム）による会議のインターネット中継を実施

【会議次第】

1 開会

2 座長挨拶

<事務局>

当フォーラムの谷口座長から一言御挨拶をお願いしたい。

<谷口座長>

本日が、今年度 2 回目の全体会議となる。今年度は、部会を 2 つ設け、各部会で各 3 回、ゲストも交えて議論を深めてきた。本日は、各部会の進捗について報告させてもらい、各部会に参加されていない方からも意見を頂きたいと思う。

今年度も残すところ 5 箇月。次年度の施策につながる成果を残していきたいと思っている。本日は部会以上に活発な意見交換を期待している。

<事務局>

本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがたく思う、

まず、はじめに委員の欠席について報告させていただく。大室委員，平井委員，竹内委員が御都合により欠席されている。

この度、委員の交代があったので、御報告させていただく。

京都新聞社の北村委員が同社内の役割分担の変更に伴い退任され、代わって新たに 1 0 月から同社論説委員の高田敏司様に御就任いただいた。また、特定非営利活動法人きょうと N P O センターの西田委員が同団体を退社され、新たに同団体から事務局長の野池雅人様に御就任いただいた。

新たに御就任いただいたお二人から一言御挨拶をお願いしたい。

<野池委員>

これまで当センターから西田が参加させていただいていたが、後を引き継いで私が就任させていただいた。フォーラムの活動に関して詳細まで分からないが頑張りたいと思って

いる。

<高田委員>

前任の北村から代わり、10月から論説委員となった高田である。市民参加推進条例制定時に市役所の市政記者をしており、条例成立時に記事を書いたが、成立後の動きを追い掛けていないので、委員就任を機会に勉強したいと思う。

<事務局>

ありがとうございました。

なお、本日の会議については、公開するとともに、インターネット上の動画配信サービスである「ユーストリーム」を利用した生中継を実施しているので、御了承いただきたい。

3 副座長選出

<事務局>

フォーラムでは、副座長を2名選任している。この度、西田副座長の退任に伴い、後任として新たに1名の副座長を選任したい。

資料3に記載している「京都市市民参加推進フォーラム設置要綱」第4条第2項で、副座長は座長が指名することとしていることから、谷口座長に御指名いただきたいと思う。

<谷口座長>

辻さんに副座長をお願いしたい。辻さんは政治学を専門とされ、さらにジェンダーや家族学にも詳しい。これからの地域社会のことを考える当フォーラムの副座長に適任だと考えている。

<事務局>

谷口座長から、辻委員の御指名がございましたので、辻委員に副座長をお願いしたい。それでは、辻副座長から、一言御挨拶をいただきたい。

<辻副座長>

専門が政治学なので市の現場のことは不勉強であるが、「長」の名が付く職は雑用係と思っているので、皆さんが活発な議論をしやすいように頑張りたい。

<事務局>

1年ぶりに日本に戻られた永橋副座長からも、一言御挨拶をお願いしたい。

<永橋副座長>

1年間アメリカのバークレーに滞在していた。帰国から4箇月経ち、リハビリ期間は終

了したと思うので、辻副座長と同じく雑用係として頑張らせてもらいたい。

4 京都市報告

<事務局>

本市では、附属機関と要綱設置審議会の設置に関して十分に整理されてこなかったため、この度、9月市会に「京都市執行機関の附属機関の設置等に関する条例」の議案を提出し、先般議決され、11月15日に施行予定となった。

要綱等開催審議会も含め全ての会議を改めて確認した中で、市民参加推進フォーラムは附属機関に位置付けられることとなり、「京都市執行機関の附属機関の設置等に関する条例」の附則で「京都市市民参加推進条例」を改正し、新たに市民参加推進条例の条文にフォーラムの項目を追加した。

附属機関になったことで、フォーラムの所掌事務が変更となるわけではない。これまでとおりに提言だけでなく、行動していただくことを引き続きお願いしたいと思っている。その内容は、市民参加推進条例施行規則第11条2項「会長が必要な事項を定める」に含まれていると解釈していただき、これまでと同様の運営をしていただけたらと思う。

なお、現在の設置要綱については条例施行と同時に廃止となる。

5 議題

(1) 協働の日（仮称）検討部会の進め方について

<谷口座長>

両部会の議論を進めてきた。各部会に参加できていない人もいるので、その方からも意見をいただきながら、議論を深めていきたい。

<永橋副座長>

この部会は「協働の日」の検討といっているが、特定のセレモニー的な日を設けることを目指しているものではない。1日だけのセレモニーではなく、いままでの協働の在り方を考えたり、社会に関心がなかった人や関心があるけど動けなかった人に活動に参加するきっかけを提供したり、または既に活動している人に自分の活動が市民参加や協働であることに気付いてもらい、自らの活動の意義を感じてもらうことを目指そうとしている。

協働の取組といっても様々なテーマがあるので、第2回会議でテーマを絞り込み、若者の活動の支援やつながりを生むことを目指すこととした。第3回会議では、若者の総合的支援を行うユースサービス協会と中高生に家と学校以外の場所を提供することを目的に活動している京都府立大学地域連携センター学生部会かごらに参加してもらい、それぞれの取組を紹介してもらった。若者に関する様々な課題を把握したうえで、既に活動している団体が課題を共有しながら、お互いにエンパワーメントできる場があると良いという議論があった。

今回の会議では、来年度から具体的に動ける企画案を考える。例えば、出会う場を作るのであればどのような団体があり、誰を呼ぶのか等、具体的にどのような企画にするのかを議論したい。

<谷口座長>

では、御自由に意見を頂きたい。

<伊藤委員>

かごらの話を聞いて私が持つ若者の活動に対する二つの先入観との違いを感じた。1つ目として、若者はイベント好きであると思っていたが、かごらは地道な活動をしていた。2つ目は、若者はSNSを駆使して仲間集めをしていると思っていたが、かごらは口コミで仲間が集まっていた。一方で、メンバーの拡大に苦慮していると思ったので、顔を合わせて出会える場づくりが必要だと感じた。

<谷口座長>

第3回会議では、ゲストも交えて議論したことで、フォーラムだけでは見えにくい現場の活動も見えて良かったと思う。

<菅原委員>

学生が地域と連携することが難しい背景として、安全面やプライバシーの問題があった。若者が地域で活動しやすくなるよう、フォーラムが仲介する必要があると思った。

<永橋副座長>

先程の報告に補足したい。かごらは中学・高校にアプローチして、家と学校の往復だけになっている中高生の居場所づくりを、大学生であるかごらのメンバーがフォローしようとする取組である。しかし、中学・高校の先生に話しても、かごらという団体を信用してもらえないことや生徒の安全確保やプライバシーの点から活動が進まないという課題があることを話していただいた。そういう団体が社会的信用を得て、活動の社会的意義を認めもらうためには、行政、関係機関、フォーラム等が連携をサポートすることが必要ということで、彼らのような団体との出会いの場を作ることが大事であることを確認できた。

<谷口座長>

子どもたちがやりたい気持ちを止めないことが大事という話もあった。あまり作り込まないプログラムが必要だ。他に意見はないか。

<本城委員>

部会では、まだ若者に参加してもらう場をつくるのか、若者に働き掛ける企画を実施するのかが決まっていない。また、どのくらい継続的な取組とし、各年でテーマや予算をどうするのか分からないので、とまどっている状態である。

<谷口座長>

これまでの議論を再度確認したい。協働の日は特定の日を定めるのではなく、対象やテ

一マを定めて、1年間又は2年間で、関心はあるけど参加できない人の参加の機会を提供しようとするものである。部会では、若者に焦点を当てて、市政や地域活動に参加したり、市民参加に関心を持つ若者を増やすには何が必要かを検討してきた。座学だけでなく、体験できる機会の提供があると良いという確認をしたと思う。

他の委員からも疑問やアイデアを頂けたらと思う。

<永橋副座長>

1年間を通じて協働の実験を繰り返すイメージを持っている。部会はユースサービス協会やかごらに積極的に参加していただき、部会そのものが協働の場、協働の日の序章となっている。とまどいは大事にしながら、議論を続けることが大事だと思う。

<辻副座長>

こちらの部会には参加していないので、対象者について確認したい。若者といっても年齢層が広い、どのくらいの年齢層を対象とするのか。また、既に活動しているが広がりの中で困難を感じている人とまだ参加していないが少し背中を押してあげれば参加する可能性のある人のどちらを対象とするのか。

<永橋副座長>

青少年活動センターは、青少年を13歳から30歳までとしている。協働の日で対象とする若者の定義は、まだまだ議論する段階にあると思っている。実年齢にこだわらず支援すべきではないかと思っている。

<小辻委員>

市民参加は実はみんなが既に行っていることだが、条例化して定義付けしないと分からない不思議な状態となっていると感じる。

サービスをされる側とする側の役割分担を考え直す日になると良いと思う。体育振興会の運動会には中高生も出ている。中高生の参加者は親から頼まれて出ている人も多いので、親をいかに巻き込むかが重要だと感じた。

<芝原委員>

部会には参加していないが、私の団体の対象者が若者なので、日々の活動で考えていることも含めて2つ話したい。

対象者の設定については、無関心層、関心あるけどまだ動いていない層、既に活動している層のどの層を対象にするのか。誰をどういう状態にすることを目指すのかを丁寧に設定する必要があると感じた。

ここ2～3年で特に無関心層を動かすことに難しさを感じている。参加したいけど参加しない人が参加しない理由としては、知らないところに一人で行くのは怖い、時間がないといったものがある。参加につながる方法として手応えを感じているのは、「若者が信頼している人からの声掛け」である。若者の身近にいて信頼されている大人にどれだけ協力し

てもらえるかが重要だと思う。例えば、大学に協力してもらうなら、大学の先生から直接学生に対して声掛けをしてもらうようなことがなければ、動こうとする人はいない。

もう一つはエリアを絞ることである。全市では広過ぎるし、区でもまだ広いと思うが、もう少し身近に感じられる程度のエリア設定の必要があると感じた。

この部会のテーマは、私自身が日々課題に思っていることなので、フォーラムで何か解決策を見つけられると良いと思った。

<谷口座長>

無関心層に参加してもらうのは難しいと思うし、市民参加は義務的にしてもらうものでもない。まずは関心のある人に参加してもらうことが大事だと思う。

地域コミュニティの活性化の観点からエリアを絞り込むことは大事だ。学区レベルでそういう取組があると面白いと思う。若者が活動しやすい環境を作るには、大人が若者の気持ちを知ることが大事だと思った。

情報発信については、京都新聞で地域社会を良くしようとする取組を特集してはどうかという話もあった。新聞なら定期的な情報発信が可能で、効果があるという話もあったと思う。

地域社会の観点から大西さんから意見をいただけないか。

<大西委員>

私の住む右京区には区民まちづくり会議がある。自治会連合会に、若い世代を区民まちづくり会議に選出してもらえようをお願いをしている。行政区や地域のことを考えるという枠組みだと、若い人と話す機会が増えてくる。

一世代離れると、なかなか親しみを持って話しにくい状況がある。しかし、私はPTAなどの若い世代のグループが動く雰囲気が変わっていくのではないかと期待している。行動を起こさないといけないし、世代の近い人に動いてもらう必要がある。地域でもすべきことはたくさんあるので、それを取り上げていく必要がある。地域社会の一員として地域や市政に関わるように働き掛けることが大事ではないかと思う。

<野池委員>

事業企画案の作成に当たり、取り組んでいる事例を伝えられれば思う。ユースビジョン及びユースサービス協会と協働してキャンパスプラザで「学生 Place+」に取り組んでいるので、大学生の事例は紹介できると思う。

<西野委員>

私たちの団体では小中学生を養成して一緒に福祉施設に行く取組をしている。こうした取組も協働の日の取組ととらえて活動すればよいのか。

<永橋副座長>

活動内容が協働の日の取組に含まれるのかという質問だったと思う。まだ答えは出せな

いが、部会でしていることがコミュニティといかにつながれるかが重要だと思った。部会では様々な方の声を聞きながら謙虚に考えていく必要があると思う。

＜谷口座長＞

大人が若者の市民参加を考える機会にするという選択肢もありだと思った。

＜高田委員＞

学生は一時的に京都に住んでいる人もおり、総体的には市民意識が弱いと思うが、学生が参加するための下地を作ることは大事だ。一方で、団塊の世代が退職して地域に参加しているが、特に男性の中には地域に参加したくてもできていない人もいる状況である。フォーラムでは、なぜ若者を対象にしたのか。

＜谷口座長＞

計画策定時から子どもや若者の頃から社会を良くする活動（市民参加）に触れる機会を設ける必要があると話していたこと。また、昨年度のフォーラムにおいて若者の参加を考えていたことから、継続性も考えて今年度も若者を対象とした。

部会では、対象として子育て世代や団塊世代等といった意見があった。そのときの社会状況に応じて、対象やテーマを決められると良い。

時間の都合上、次の議題に移りたいと思う。部会では、芝原委員からまとめていただいたように、対象をどうするのか、エリアをどうするのかについて、次回の部会で議論して具体的な企画案を練り上げていきたい。

（２）協働のルール（仮称）検討部会について

＜芝原委員＞

これまでに３回の議論をしてきた。部会の名称となっている「ルール」という言葉に縛られず、協働を進めるために良いものを作っていこうというものである。この部会では、組織対組織の協働をイメージしている。行政とＮＰＯだけでなく、民民の協働も含めて考えていきたい。

１回会議では、各委員から協働の事例を持ち寄って議論をした。ここでは、勤務形態が違う団体では業務の進め方が違うという事例や情報共有の方法が組織文化によっても違うという事例が話された。

２回会議には、京都府府民力推進課の鈴木課長をお招きして、協働の宣言「京都ウェイ」の策定過程や課題について意見交換を行った。それを踏まえて、フォーラムでは「京都ウェイ」と同じようなものをつくるのではなく、相互に補完できるものができたら良いという方向性を持っている。京都市は「京都ウェイ」にまだ署名できていないので、改めて署名を検討しても良いのではないかという議論もあった。

協働を進めるには「出会う前」と「出会った後」の２つの段階があるという議論があった。部会では、「出会った後」に起こるであろうトラブルをどう解決するのかを記載したヒント集のようなものを作成できると良いと考えた。スローガンのようなものではなく、具

体的に協働して悩んでいる人に使ってもらえるものとしたい。まずは簡易なものを作成して、改良していくものであるというアウトプットのイメージを共有した。

実際に協働に取り組んで困ったことがあった方に集ってもらい意見交換する市民参加円卓会議を開いて具体的な事例等を集めていきたい。

また、真っ最中のトラブルは話しにくいという議論もあった。

<伊藤委員>

行政とNPOの協働が中心になっているのではないか。地域や企業との協働をもっと考えなくて良いのかと思う。商工会議所のCSR担当の方にも参加してもらえないだろうか。

<小辻委員>

失敗事例や乗り越えた事例を丁寧にまとめていく必要がある。各団体の内部に蓄積されていることを整理して公開することが、取り組みを始めた団体には参考になると思う。覆面座談会のようなものを開催して、様々な団体から意見を出してもらい、まとめていきたい。

<西野委員>

協働のルールのイメージについて、会議の回を重ねるごとにイメージができた。協働における様々な問題点は仲間内でしか話さない。他の団体の失敗事例があると、自分の団体と照らし合わせて、新たな気付きにつながると思うので、ヒント集ができることを期待したい。

<谷口座長>

様々な立場の人に集ってもらい、困り事や失敗事例、乗り越えた事例を話してもらう場を設けたい。その議論の要点をまとめたものを作成して、広く伝えることができると良い。伊藤委員から提案のあった部会に関係者を呼び話してもらうこともアイディアとして良いと思う。

<辻副座長>

企業を呼ぶことはできると思うか。

<本城委員>

製造業は活動そのものがCSRととらえているところが多い。ある地域では、地元企業が就職活動に消極的な方を試しに採用して、地元で就職する人材を増やそうとしている。大企業はそのような自由度が少ないので、対象とするなら地元企業になると思う。

<野池委員>

まだ幅広いようなので、絞り込みの議論が必要だと感じた。

第4回会議で、円卓会議や成果の広め方について記載があるが、この点について教えて

もらいたい。

<谷口座長>

円卓会議はテーマを決めて市民の方に来てもらい語り合う場である。昨年度は若者の市民参加をテーマに議論した。当部会で円卓会議を開催してはどうかと考えている。

<野池委員>

全国で円卓会議が開催されており、沖縄の円卓会議は興味深い取組だと聞いているので、参考にできるのではないかなと思う。

<菅原委員>

連携を生み出していくため、行政や中間支援組織が地縁組織の方にNPOを紹介することが大事だと思う。

<谷口座長>

出会いの段階から支援する必要があるという指摘だと思うが、十分に成果が出ていないのではないかな。

<高田委員>

組織設立のヒント集のようなものは作成しないのか。

<谷口座長>

行政主導で取り組んでいるものが多いので、当事者間で議論して決めていくことが大事なのではないかというものである。協働のマニュアルやヒントがなく困っているところに、参考となるものを今年度中に作成しようと考えている。

<永橋副座長>

成功事例はあまり参考にならないので、失敗事例から学べるものを作成することは良いと思う。協働の日部会も協働のルール部会の活動とリンクする必要がある。

フォーラムの強みは2つある。一つは、「手引き」「ガイドブック」等といったテキストを作成することである。もう一つは、サロンや円卓会議のように場をデザインすることである。

人の価値観そのものをデザインするのは難しい。また、人の時間は束縛できるものではない。しかし、場をデザインすることで、自分だけでなく、他人も同じだと気付く機会を提供することができる。

フォーラムが直接若者を支援するわけではない。既に取り組んでいる団体が元気になるようにして、その結果、今まで動けなかった人が関わっていくようになるための場をデザインすることが、価値観の共有に繋がる。協働の日検討部会でも議論していきたい。

<谷口座長>

本日の議論でアイデアが出てきたので、各部会の議論にいかしていただきたい。協働の日部会は今年度企画して次年度実施の予定である。協働のルール部会は今年度中に形にしようと考えているので、引き続き議論をお願いしたい。

(3) 市民公募委員サロンの運営について

<谷口座長>

1回目のサロンでは、終了後に委員間でメーリングリストを使ってサロンの運営方法について活発な議論が行われたところである。2回目のサロンの内容を決定するのは次回の全体会議になるので、本日はおおまかな方向性やアイデアを出してもらえると良いと思う。

<事務局>

市民公募委員サロンは市民公募委員の交流を深めるとともに、意見交換することで、審議会委員としての充実した活動につなげることを目的に年2回開催している。

今年度は、1回目を8月に開催。2回目を来年3月に開催する予定である。1回目は参加者が6名と少なく、サロン終了後に委員からメーリングリスト上で運営方法について様々な意見が出されたところである。委員からの意見を紹介させてもらいたい。

- ・ 市民公募委員のニーズと合っていない可能性がある。内容や形式を1回目に参加した公募委員と一緒に考えられないか。
- ・ 「審議会を市民参加により進める前提は整っているのに改善されない」という前提を疑い、運営側の生の声を聞く場を設けてはどうか。
- ・ サロンは期待と不安を共有する。または委員として意見を発信する受皿で良い。「共有」と「議論」が交錯した場合は、フリータイム後に委員や事務局がフォローしてはどうか。
- ・ 自己紹介の時間をはじめにもう少ししっかりとってもらったほうが、相手を知れて議論をしやすいのではないか。

以上のような意見を踏まえてどのような内容とするのかを御検討いただきたい。

<谷口座長>

前回のサロンに参加した委員から意見をいただきたい。

<小辻委員>

附属機関の見直しがされることに伴い、市民公募委員サロンの対象者は変わるのか。

<事務局>

これまでも附属機関だけとしてきておらず、今後も要綱で開催される会議等からも参加してもらおうつもりである。

<小辻委員>

市民公募委員といっても経験が豊富な方や何度も落ちている人もいますので、様々な人が参加できるよう過去の公募委員の方も対象としても良いのではないかと思います。

<伊藤委員>

1回目に対象者を絞ったのは、積み上げていくサロンができないかと思ったからである。2回目は1回目に参加した人がどう変わったかを見ることを狙いとしていた。フィードバックが不十分ではないか。交流に力点を置いていると思うが、それは1回目だけとして、2回目はもっと深める場としても良いのではないかと思う。

<谷口座長>

参加者が6名しかいなかったのは、企画内容と市民公募委員のニーズが合っていない可能性があるかと辻さんが指摘していたが、いかがか。

<辻副座長>

参加者が6名だったのは残念だった。1年以内といいながらも過去にも市民公募委員の経験のあるような人が多かったので、対象を1年以内にする必要はないと思った。一方で、1年目の人もいたので、両方のための良い場となると良い。不満の発散の場になっていたが、勉強にもなり楽しいサロンになると良いと思った。

<菅原委員>

参加者の中に「学識者に多くの謝礼を払っている」といって攻撃的な口調で話されている方がおられた。条例に基づいて運営されている審議会もあるので、審議会に関して不満があるなら議員を通じて議会にも伝えるのがスジではと思った。

任期を終えた方も参加されていたので、サロンそのものについては期待してもらえていると思う。市民公募委員は学識者と違い、市民としての視点を持って発言するべきではないか。市民公募委員のあり方が今また問われているのではないかと思う。

<谷口座長>

学識者だけが高い謝礼をもらっているといった誤解は市民にもある。それを気付いてもらい改善していけたら良いと思った。

サロンに関心を持ってもらえていない。来てもらえるようなテーマ設定や学びの場を設けても良いと感じた。どういう場であれば良いのか。場のデザインが不十分だったのかもしれない。交流に重点を置いて緩い場としているが、もう少しテーマの絞り込みがあっても良いと思った。

<芝原委員>

時間設定や日程や場所によっても変わるかもしれない。日中の設定だったので、仕事をしている人は参加できないと思った。誤解を持っている方もおられたのは受け止めて、誤

解を解く場を作ることが大事だと思った。参加者の話の中で、会議直前に膨大な資料が送られてくるうえに、専門用語が多いというのは確かにそうだった。審議会の議論に参加したいけどできない状況があるのは間違いないと思う。

<永橋副座長>

審議会は政策形成過程で重要な役割をもっている。「審議会等運営ガイドブック」にも市民公募委員が重要な役割であることを記載しているが、十分に活躍できていない状況があるようである。もっと主催者側が努力することで変えられることがあるのではないだろうか。

また、サロンで話された不満を受けたときに、委員は意見を聞き取って橋渡しをする、翻訳作業のような役割があるのではないかと思った。

<本城委員>

不安を共有する場という設定だったと思うが、私はフォーラム委員の方にも温かく迎え入れられて不安を感じていなかった。時間が経ち、会議を重ねるうちに不安が高まってきている。自分の課題が分かるようになり、いまサロンが必要だと思う。しかし、私が他の審議会の市民公募委員で不安を感じてサロンに参加したと仮定して、果たしてここで理解してもらえるのだろうか。むしろ同じ審議会の委員に不安を理解してもらい、解消したいと思う。サロンで不満を言われている方についても、所属する審議会でもフォローしてもらうことが建設的だと思った。

小辻さんが発言されたように、市民公募委員になれないという人も参加する出会いの場とすることで、サロンは活発になるのではないかと感じた。

<谷口座長>

不安は共有できているだろうか。

<本城委員>

この場で発言したことは全て記録され、公開されるので、言っていることとダメなことが分からない。メーリングリストでも投稿すると、広がっていくので投稿しにくい。ざっくばらんに相談できる機会があると良いなと思った。他の審議会の市民公募委員の方もそう思っているのではないか。

<谷口座長>

サロンで出た意見をどう審議会全体やサロンの運営の改善にいかしていくのかが大事だと思った。

審議会の運営をどう変えていくことができるのか。ガイドブックがきちんと使われているのか。まずはこのフォーラムから変えていくことも大事だと思う。

サロンをどうするのか、審議会の運営の改善にどういかしていくのかを今後も議論したい。次回の会議でたたき台を提示させてもらいたい。アイデアがあればメーリングリス

トに投稿していただきたい。

（４）その他

＜谷口座長＞

では、審議会情報シートの確認に移る。

＜事務局＞

資料１１を御覧いただきたい。新たに審議会を設置する際、担当課から市民協働政策推進室に事前相談があり、その際に提出いただいているのがこのシートである。前回のフォーラム以降に提出された３件である。

１つ目が「京都市子ども・子育て会議」、２つ目が「小栗栖排水機場における浸水被害検証委員会（仮称）」、３つ目が「京都市上下水道事業経営審議委員会」である。

女性の登用率達成の３５％を超えた審議会が２審議会。委員の公募を行っている審議会が２審議会。審議を公開している審議会が３審議会である。

女性の登用率及び公募を行っていない審議会は、「小栗栖排水機場における浸水被害検証委員会（仮称）」である。当委員会は、９月末明に発生した小栗栖排水機場周辺の浸水被害について、第三者委員会を設置し、本委員会の中で、排水機の一時運転停止と浸水被害の因果関係の検証及び浸水被害の原因分析を行うことを目的としており、河川工学、水文学及び行政法の専門的見地から検証を行うことに加えて災害対応のため、迅速に委員会を立ち上げる必要があり、公募期間の確保が難しかったことが理由である。

＜小辻委員＞

「小栗栖排水機場における浸水被害検証委員会（仮称）」は、公募はできなかったにしても、地域の方が意見を述べられる機会を設けることはできたのではないか。

＜谷口座長＞

「上下水道事業経営審議委員会」は女性委員のほうが多く、めずらしいケースであるが、何か聞いているか。

＜事務局＞

所管課から特に理由は聞いていないが、必要な人材を考えたときにこういった構成になったのではないか。

＜永橋副座長＞

外国籍市民も応募できるようにしていることを見ると、頑張って公募条件を定めたのだなと思った。

＜谷口座長＞

頑張っているところも紹介してもらえると良い。公開や公募はできるだけ多い審議会で

取り組んでもらいたいと思う。どうすれば、実現できるのか継続して考えていきたい。

本日の議題はこれで終了とするが、傍聴者の方から意見はないか。

<傍聴者>

フォーラムの部会にユースサービス協会の職員が参加していることをOBとして嬉しく思っている。イベント参加者に高齢者が多い。高齢者が高齢者を助けており、子どもがいない学区もある。西院の地域行事には子どもが多く参加しており、子どもも楽しんでいる。小学生はお客、中学になると地域に参加しなくなる。このあたりの課題を解決してほしいと思う。

<動画配信委託事業者>

発言はなかったが、視聴者はのべ15名であった。

<谷口座長>

傍聴者の方にはアンケートに御協力いただきたい。

では、議事は全て終了したので、事務局へマイクを返したい。

<事務局>

これをもって第41回会議を終了させていただく。

第 5 回 協働の日（仮称）検討部会摘録案

- 1 日 時 平成 25 年 12 月 9 日（月）午前 10 時～正午
- 2 場 所 京都市役所 寺町第 1 会議室
- 3 出席者 市民参加推進フォーラム委員 7 名（伊藤委員，大西委員，小辻委員，菅原委員，谷口座長，永橋副座長，本城委員）
公益財団法人ユースサービス協会 村井繁光氏
京都府立大学地域連携センター学生部会かごら 中野綾氏，片山氏
事務局 4 名（高溝室長，北川課長，宮原係長，堀）
- 4 傍聴者 なし（Ustream 7 名視聴）
- 5 特記事項 動画共有サイト Ustream による会議のインターネット中継を実施
- 6 内 容
 - 本日は，事務局側，委員側ともに協働の日そのものは何なのかという不安を感じているので，イメージを再度共有したい。先日，座長，部会長，事務局とで協議を行い，資料 2 の枠組みであれば **Let's"KYO"Together!** との兼ね合いもできるのでないかと話し合った。まず事務局から資料 2 について説明いただきたい。（永橋）
 - （資料 2 に基づき説明）

資料 2 は懸念している点を洗い出したものである。**Let's"KYO"Together!** は市民自らが京都のまちづくりに貢献していこうとする気運の醸成を図り，参加や協働に取り組む市民層の裾野を広げるために昨年度から実施しているものである。協働の日は，**Let's"KYO"Together!** と目指す目的が同じではないかと感じているので，**Let's"KYO"Together!** と一体的に啓発事業として進めていってはどうかと考えている。

これまでの議論の中で各年度テーマを設定して，従来のラジオの中で，まだ関心が薄い層に参加の行動につなげていくことができないか。参加を呼び掛ける対象は，個人にしたい。呼び掛けるのは京都市だけでなく様々な立場の人を想定している。来年度は情報収集の方法として，若者支援に取り組む民間団体及び行政機関のうちいくつかからヒアリングを行い情報収集するとともに，ラウンドテーブルをしてはどうか。ヒアリング内容としては，参加に障害のあることは何か？それを壊す知恵や物語の収集を行い，ラジオ，新聞を使って情報発信をしていくことで，新しい団体の交流，口コミの情報発信につながっていくのでは。25 年度に作成する協働のルール（仮称）の周知にも使えるのでは。FM と協働していた **Let's"KYO"Together!** を協働の日に取り込み，若者に参加を呼び掛ける取組をしたい。（事務局）
 - 事務局から説明があったが，みなさんから感想，意見，疑問をもらいたい。（永橋）
 - 平成 26 度の取組の検討と考えれば良いか。（菅原）
 - 部会の議論をまとめるとこうなるかと思うが，進め方も含めて検討いただきたい。（事務局）
 - 今年できても来年できないものもあるのではないか。平成 26 年度にヒアリングをするのなら，平成 25 年度は何をするのか。（菅原）
 - 協働の日の取組を行うことにより，活動している団体が元気になって欲しいし，まだ市政やまちづくりに参加していない人にも参加して欲しいと思っている。京都市では，**Let's"KYO"Together!** に力を入れて取り組んでいるが，市会や事業仕分けで効果について疑問が出されている状況である。しかし，協働の日が取り組もうとしていることと **Let's"KYO"Together!** が目的としていることは同じである。（永橋）
 - **Let's"KYO"Together!** は市民協働の推進に役立つことを周知しないといけない。企業への寄付の呼

び掛けの取組で企業の反応があると聞いているが、リスナーの反応が薄いので事業を終わらされるのではないかと思っていた。(菅原)

- Let's"KYO"Together!の冠の下で、これまでのラジオだけでなく、ラウンドテーブルや新聞による広報など様々な取組を行っていくという認識でよいのではないかと。Let's"KYO"Together!を単なるラジオ広報と捉えるのではなく、協働の日も含めて、Let's"KYO"Together!の中の一つの位置づけだという認識にしていきたい。(永橋)
- 今回しようとしているのは啓蒙ではなく創起ではないか。そう考えると、資料2に図示されているピラミッドを逆にしてはどうか。ピラミッドだと上から目線に見える。市民は多様なのでそういったことを考えながらやっていかないといけない。具体的な中身は平成26年度に取り組めば良いと思う。対象は「個人に働きかける団体」ではなく、「仕組み」ではないか。同じ価値観を持った者同士が共振するような取組が大事ではないか。(伊藤)
- 市民参加はトップダウンではなく、ボトムアップの性質のものであることを忘れてはいけないという御指摘だった。逆ピラミッドとは、動いている人を増やしていくということ。市民は多様で波長が違うということも頭に置いておかないといけない。上から目線でまとめてしまうものではないという指摘だった。(永橋)
- まちづくり関係者から、テレビでまちづくりの情報を見たとは聞いたことがあるが、ラジオで聴いたということはあまり聞いたことがない。ラジオによる普及は難しいのではないかと。また、情報発信の時間帯も問題なのではないかと思っている。(小辻)
- 私がピラミッド図を考案したので、少し補足説明をしたい。このピラミッドは権力を表しているのではなく、市政やまちづくりにどれだけ関心を持っているかを図にしたものである。Let's"KYO"Together!はFM放送局とタイアップしているので「音楽が好きな若者」を対象としているが、我々の考える協働の日は、「Let's"KYO"Together!=ラジオ」ではなく、Let's"KYO"Together!という傘の下に、ラジオだけでなく、新聞による広報、ラウンドテーブル等、協働の日という取組をしていくこと。若者という点では、FM放送も続けたらいいし、若者の取組を新聞に載せることで、他の世代の方にも読んでもらうことで幅を広げられないかと思う。(谷口)
- 若者を対象にするならLINEのスタンプがいいのでは。(小辻)
- LINEはまず対象者に関心を持ってもらわないといけない点で難しいが、ラジオは関心のない人にも伝えられる効果がある。各メディアの特性に応じた効果はある。(村井)
- 方法論の議論も大事であるが、まずは、協働の日はLet's"KYO"Together!の冠の下で取り組む、という認識を統一したい。かごらのメンバーをここまでの議論を聞いていてどう思うか。(永橋)
- ラジオでは機運や関心が見えにくい。ラジオにこだわらずLet's"KYO"Together!の中で様々なことに取り組めばいいと思う。(片山)
- 団体が発信ツールを持っているのは重要だと思っている。いまは行政側が情報を取捨選択して発信しているが、市民側から情報を選んで発信することに転換することが大事だと思う。レクリエーションの理論でよく使われるC S S理論(キャッチ・スポットライト・スプレー)がある。いまの協働の日の内容は、市民団体がキャッチして、ラウンドテーブルでスポットライトをあて、ラジオや新聞でスプレーする枠組みになっているので大丈夫だと思う。(村井)
- ラジオもいいと思うが、人のつながり、今あるものとの繋がりを進めていくのがよいのではないかと。確かなものは人のつながりである。踏み出しやすいものを見つけていくことが大事だと思う。(大西)
- フォーラムが個人とつながるのは難しいのではないかと。フォーラムはまず団体とつながって、その団体が個人につながるといった形なら考えられる。フォーラムが繋がれる団体と、つながれる場を作るとするのがいい形だと思う。(永橋)

- フォーラムは仲人的な立場に徹して、市民を中心に動いてもらおうと良い。団体と団体、団体と個人など、様々な主体をつなげる役割をすべき。フォーラムも Let's"KYO"Together!に関わるべきだと思っていた。(菅原)
- フォーラムも Let's"KYO"Together!に関わっていけばよいと思う。(永橋)
- なぜFM放送なのかの補足説明をしたい。まちづくりに関わっているのは年配の方が比較的多く、もしかするとAM放送を聞いておられる方が多いかもしれない。ただ、昨年、フォーラムで、若者の参加を増やすことをテーマに検討した中で、若者から「楽しい仕組みがあると参加するかもしれない」という意見があったことから、若者がよく聞く音楽が流れるFM放送が使えると考え、取り組んでいるものである。また、ライブ等の楽しいイベントにも参加して楽しめるコンテンツ作りにも取り組んでいる。ラジオを聴くだけでは参加の行動にはつながらないと思っている。信頼できる人からの呼び掛けが一番効果あると思っており、今後はラジオによる呼び掛けとともに、信頼できる人からの呼び掛けの仕組みをどうすれば構築できるかを検討したい。(北川)
- Let's"KYO"Together!の冠でまとめるのは賛成である。事業仕分けの対象となったと聞いたので、事業の必要性やラジオを利用する理由について知りたいと思っていたが、先程の事務局からの説明で納得した。前回の全体会議で、若者に参加してもらうには、若者の身近な方の声掛けが必要であるとか、エリア絞った方が良いのではといった話があったと思うが、まだその議論をできていない。また、誰に対して、どういう状態になることを目指すのかというのが見えない。方法論の議論になりつつあると感じる。(本城)
- 具体的な連携の仕方は検討が必要である。協働の日については、ラウンドテーブルやラジオ、新聞といった方法で個人が一步踏み出すような取組を行い、フォーラムの役割は仲人、という形で納得していただいたということによいか。(永橋)
- 目的と方法論は合わせて考えないといけないと思っている。本日の目標地点までは理解した。FM放送を利用したことによる目標の達成見込みはいかがか。(本城)
- ラジオを聞いただけで市民の行動が大きく変わるとは思わないが、ラジオを聞いて何かをしてみたいということにはつながるのではないか。今は団体が取り組んでいる内容を紹介しているだけテレビであれば視覚と音声で働き掛けられるが、ラジオは音声だけなので、どの程度伝わっているのかなと思っている。もっと違った使い方ができるかもしれない。
好きなミュージシャンに言われると心に響くというはあるかもしれない。イベントでミュージシャンの方に Let's"KYO"Together!の趣旨と一緒にブース出店していることを来場者に伝えてもらったところ、100人以上の方がブースに寄って寄付をしていただいたことがある。フォーラムの場で様々な広げ方のアイデアも議論できればと思う。(北川)
- ロゴは良い。このような今あるツールを最大限活用すべきだと思う。(本城)
- 撒き餌して一本釣りするという例えで、撒き餌はラジオ等のマスメディア、一本釣りは個人の伝え方によって異なってしまう。フォーラムとしては団体に働きかけ、団体がそれぞれに合わせたツールで周知していけばよいと思っているので、フォーラムはツールの使い方までは考えなくてもよいのではないか。(伊藤)
- ここで一度整理したい。協働の日の取組を Let's"KYO"Together!中でやっていくことは共通認識となったということによいか。また、Let's"KYO"Together!の在り方、ツールの使い方について、知恵やアイデアを提起していくようにしていきたい。残りの時間は取組内容の方法を検討していきたい。(永橋)

- ラウンドテーブルの検討として、若者関係の団体をまず挙げていただきたい。(永橋)
- ユースサービス協会、ユースビジョン、シチズンシップ共育企画、YMCA・YWCA、BBS（ブラザーシスターズ）、ユネスコ、ボーイ・ガール、人づくり21世紀委員会、少年補導、消防、山科醍醐こどものひろば、きょうとNPOセンター、大学・高校・中学系。(村井)
- ちびーず（京都府の関係で、地域ビジネス）、ふれあい吉祥院ネットワーク、右京ベジトラック、京北プロジェクト（立命関係）、つながるKYOTO（小辻委員関係）、旧100人委員会。(小辻)
- 文化市民局勤労福祉青少年課（青少年活動センター、青少年モニターなどの所管、審議会への若者の登用も促進している）、総合企画局市民協働政策推進室大学政策担当（学まちコラボ事業、大学コンソーシアム、学生プラス）、教育委員会生涯学習部。(北川)
- PTAは民間組織になるのか。(菅原)
- 教育委員会が所管している。(北川)
- 生涯学習部と一緒にやれるといいのでは。若者の携帯電話の利用方法について親のサポートなどを検討していると聞いている。おやじの会などもいいのでは。(小辻)
- 人づくり21世紀委員会はそういった取組をしている。(村井)
- 26年度はどこに焦点を当てるか。どのあたりをどういう効果を狙ってどういう場にするかを考えたい。例えばかごらは中高生への参加の働き掛け方で悩みがあると思う。教育委員会と一緒にできるといいのではないか。(永橋)
- 学校の方もNPOの情報を知らないで、連携が難しい。一方で、NPO側も学校の情報を知らない。(小辻)
- コーディネート役をするにあたり、どの部署に当たれば良いか。(永橋)
- PTAなどは生涯学習部、学校教育プログラムなどは学校指導課だと思う。(北川)
- 資料2の取組イメージ「情報収集」「情報発信」「交流」の分類ごとに戦略を考えると、「情報収集」「情報発信」では話題になりそうな団体をピックアップし、「交流」なら若者を対象に長く活動している団体や新規参加者が出会う場にするといった工夫があると良い。(谷口)
- ルール部会では、NPO、企業、寺社など様々な目的を持つ団体にヒアリングに行くが、協働の日部会では、若者というテーマがあるのでヒアリングの集約はしやすいと思う。例えば、若い方に入っただけにはどういうことが考えられるかといったアンケートを取り、その中から集まってもらったり、ヒアリングしたりしてはどうか。アンケートの内容は絞り込んで取り組むことが大事だと思う。(本城)
- アンケートによってヒアリング先を決めてもいいかもしれない。かごらの2人は、もしアンケートが来たら、苦労や成功例、失敗例をどのように答えると思うか。個人に向けて活動されている皆さんの苦労などを把握して、来年度フォーラムとして何か取り組みたいというアンケートが来たらどう思うか。どういうアンケートが来たら答えたいと思うかを知りたい。(永橋)
- 団体の知名度が低いので、アンケートに答えることで情報発信できるとか、メリットあると答えるかもしれない。(中野)
- 情報はどこから仕入れるのか。(小辻)
- 「学生 Palace+」でアドバイスを受けている。ひきこもりの子に外へ出てきてもらうきっかけとする「かごら学級」に取り組もうとした際、京都市や他都市の団体に話を聞きに行ったが、知名度がなく信頼関係がない中では、そういう取組は難しいのではという意見もあり、まずは知名度を上げるため、「かごらカフェ」からやっ払いこうということになった。どういうところから情報収集をしたらいいかも分からなかったで、行政から情報を得ようともしていなかった。(中野)
- 「学生 Palace+」は行政が民間団体に受託させて取り組んでいるものである。(村井)

- 京都市のホームページでもあまり「若者支援」という文言は見ない。他都市へのヒアリングに行ったそうだが、どのように情報収集したのか。(菅原)
- 先生の紹介や、インターネットで調べた。検索用語は「フリースクール」という言葉で検索した。(中野)
- そういうことは大学では教えてくれないが、学生のスキルアップ講座のようなものがあると良いのかもしれない。知る機会があれば参加しようという気になるか。(永橋)
- 機会があればするかもしれない。(中野)
- 学生団体も、参加すると、いい情報を入手できたと喜んで帰るが、まず参加してもらうまでが大変だと感じる。(村井)
- 撒き餌はできているが、一本釣りはできていないのでは。(伊藤)
- 人が集まってくれないことなど、それぞれ悩みを抱えていると思うが、まず、そういう団体の相談を受けているような、ユースサービス協会やユースビジョンなどの団体にヒアリングに行ってはどうか。どういう問題意識を持っていて、どういう取組をしているのかというのをまず聞いてから、個別に団体と呼び込んでどうか。(北川)
- そのとおりだと思う。いままでうまくいっていた支援の取組と現在動いている団体の望むものがずれてきている可能性があるのかもしれない。(小辻)
- キャンペーンの目的は何かをもう一度考えると、若者に深入りしすぎているように思う。団体が抱える問題は、フォーラムでヒアリングして出てくるとは思えないし、それよりは、既に取り組んでいる団体の取組を取り上げて発信することが重要なのではないか。この団体、この人にスポットを当てて掘り起こす作業をしても良いのではないか。(谷口)
- 中学生サミットなどと連携する仕組みを構築することはできないものか。(村井)
- 連携の仕方によるのでは。冠に **Let's"KYO"Together!** を付ける程度ならできるかもしれない。この目的を共有し、それぞれの強みを生かして何かをするというのは、まず一緒に動いてもらえる団体を探すことかと思う。(北川)
- 大きな枠組みの取組を行う、一方でスポットを当てて広めていく、という活動でいいのでは。(村井)
- 協働の日と **Let's"KYO"Together!** の内容は理解できた。人と人のつながりを提供するための1つとしてラジオによる情報発信やラウンドテーブルなどをするというのはいい取組だと思った。(片山)
- この部会は「情報発信」と「交流」の2つを中心に取り組むことだと理解した。もともとやっている活動や新しい流れなどがあるので、それを情報発信し、それと連動して交流につなげる。どこにスポットを当ててるのかをもう少し検討する必要があるのではないか。次回は、どこにスポットをあて、情報発信するのか。ヒアリングは個別にあたるのか、勉強会に呼ぶのか。ユースサービス協会、ユースビジョン、京都市の3課に来てもらって勉強会を行うということでどうか。(永橋)
- 様々な団体が集まることは、そこに来た人にとってはいい場になると思う。その場で出たものをまとめて発信するまでは難しいと思う。スポットをあてるのは団体に推薦をもらうのか、公募にするのか、といったところまで決めて、次年度につなげてはどうか。(谷口)
- 事業の内容を検討する材料がまだ少ないため、それを集めるための勉強会をして、並行して内容を検討する必要があるのでは。(北川)
- 今年度にヒアリングすることは日程的には難しいが、来年度に何をすべきかの枠組みは考えておきたい。そのためにも行政や団体がどう考えているのかを聞きたい。(永橋)
- まずは核となる団体に何をすべきか聞き取り、アンケートやヒアリングは来年度でいいと思う。(菅原)

- 全体の確認として、1つは、Let's"KYO"Together!の大きな枠組みの中で、協働の日を取り組んでいこうということ、もう1つは、ユースサービス協会等に、取り組み内容などを勉強会で聞き取ること。来年度にどういう団体にスポットを当てて、取り組むのかを明確にすることを目標としたい。(永橋)

「協働の日（仮称）」検討部会の今後の進め方について

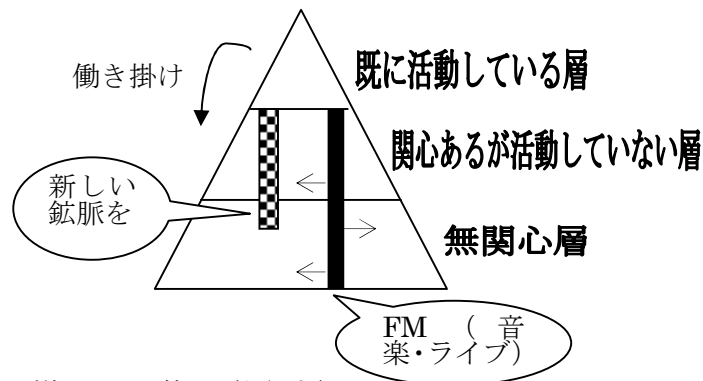
1 概要

「Let 's “KYO” Together !」キャンペーンは、市民自らが京都のまちづくりに貢献していこうとする気運の醸成を図り、市政やまちづくりへの参加や協働に取り組む市民層の裾野の拡大を目指すものである。

これまでの議論の中で「協働の日（仮称）」が同キャンペーンの趣旨・目的と同じであると考えられるため、同キャンペーンも含めて参加と協働を促進する一種の啓発事業として一体的に取り組むこととしてはどうか。

例えば、各年度でテーマを設定し、従来のラジオ放送による情報発信等に加えて、「既に動いている層」の賛同者を増やし、「関心あるが動いていない層」「無関心層」に対して参加行動や寄付を呼び掛ける取組を展開することとしてはどうか。

(イメージ図)



2 対象

個人（個人に働き掛ける団体を増やす）

3 平成26年度取組のイメージ

(1) 情報収集

ア 方法

民間の若者支援に取り組む20団体のうちのいくつか及び「若者支援」に関わる行政機関からヒアリング又はラウンドテーブル

イ 聴き取り内容

テーマ、参加の障害となっていること、壊し方の知恵、物語（新しい気づきや動きが始まる。人や状況が変わる）の収集と精査

(2) 情報発信

(1)の団体紹介やタイムリーで気軽に参加できる取組をラジオや新聞で情報発信

(3) 交流

ラウンドテーブルで各団体同士の交流&団体と若者の交流&若物と若者の交流さらにはその中から新しいコラボの動きをプロデュース

(4) その他

平成25年度中に作成する「協働をすすめるヒント集（仮）」の周知にも利用

第 5 回 協働のルール（仮称）検討部会摘録案（抜粋）

- 1 日 時 平成 26 年 1 月 16 日（木曜日）午後 2 時～午後 4 時
- 2 場 所 職員会館かもがわ 3 階 第 1 多目的室
- 3 出席者 市民参加推進フォーラム委員 8 名（伊藤委員，小辻委員，芝原委員，菅原委員，竹内委員，谷口委員，辻委員，西野委員）
事務局 4 名（高溝室長，北川課長，旗課長，宮原係長，堀）
- 4 傍聴者 なし（Ustream 3 名視聴）
- 5 特記事項 動画共有サイト Ustream による会議のインターネット中継を実施
- 6 内 容

（1）ヒント集の構成について

資料 6－2「協働のルール（仮称）部会 模造紙まとめ」参照

（2）ヒアリング内容について共有

資料 6－2「協働のルール（仮称）部会 模造紙まとめ」参照

（3）ヒアリング内容を踏まえたヒント集の内容について

- 付箋の枚数を見ていると始めるまでが特に大事だということが分かった。（北川）
- しっかり準備をしていたから実施の部分でそれほど問題がなかったヒアリングが多かったのかもしれない。（芝原）
- 逆に終了，評価の部分はあまりやっていないのかもしれない。（谷口）
- もう少しヒアリングの対象者を広げて良いのかもしれない。（伊藤）
- 最初が肝心なので「協働をはじめるヒント集」でも良いのではないか。最後の振り返りはまだできていないのかもしれない。内部評価はなかなかできていない。（菅原）
- 「実施」の部分で嫌なことは後で忘れてしまう部分もある。最初を間違えると修正できない気がするため，やはり最初が重要ではないか。（小辻）
- ヒアリングした中で聞いた話だが，当初の目的に向かって 3 つの地域を同時に進めようとしても，1 つの地域で動かない人がいたら，動かない人を説得するよりも，他の 2 つの地域から進めるという話があった。リスクを小さくしていく努力や目的や課題を共有することではないかと思う。（竹内）
- 協働相手のことを熟知していると，協働の方法が違うことがある。例えば，団体によってはトップダウンやボトムアップが良いかを見極めて関わり方を変えているようだ。（菅原）
- 少し補足するとトップダウン型ではうまくいかないのでは，組織内部の問題と捉えてもらえるよう，そのポジションの方に話を持っていくようにされているといった話を聞いた。（竹内）

（4）円卓会議の開催内容について

- 今出したものを，円卓会議でどう使うか。（芝原）
- 抽象的な話のため，具体的な手立てを知りたい。重要と思われる問いをいくつか考えて，円卓会議で具体的な解決の方法を話し合ってもらおうという方法はどうか。「問い」を考えたい。例えば「手間要らずで充実した振り返り方法」「文化の違う組織とどううまくするの」といった問いがあると具体的なアイディアや意見がもらえると思う。（谷口）
- 次の取組に繋げるための評価の方法の問い掛けはどうか。（伊藤）

- 良いと思う。他の委員も意見がないか。(谷口)
- 私の団体ではメンバーで事業を振り返る度に良いアイデアが生まれて、実力以上に対応しようとして大変な思いをしたことがある。理想評価でなく実態を伴った評価方法を知りたい。(西野)
- トラブルも2つある。団体間と団体内。協働することによるトラブル、失敗した事例の話を聞きたい。団体内のトラブルもある。(小辻)
- 組織内は協働をきっかけとしたものではない。日頃からの付き合い等が問題なのではないかと思う。(北川)
- 協働をはじめるまでの部分もあると思う。どうして協働に向かうのかの問いは立てられないだろうか。(竹内)
- ヒント集の読者は、協働をこれからする人、協働をしている人のどちらか確認しておきたい。(小辻)
- 両方を対象としている。(谷口)
- 協働に向かうのを迷っている方は協働にメリットを感じていなかったり、自分だけで解決すべきと思っている人がいるのでは。協働のメリットを挙げてもらうのはどうか。(菅原)
- 事例を1～2件挙げるものもあってもいいのでは。(小辻)
- メリットのページのことを考えていなかったのも、円卓会議で話していただいてもいいかもしれない。(辻)
- 協働のメリットとは？という問いにはいいのでは。(谷口)
- いくつかの問いと、ヒント集素案をお示しして意見をもらっては。(辻)
- ヒント集を作るための場として円卓会議にするのではどうか。(芝原)
- テーブルごとで問いを投げ掛ける人がいる方式でも良いと思う。(谷口)
- 現時点で4つは想定されると思う。①協働のメリット②なぜ協働に向かうのか③協働に取り組んでいる途中のトラブルの乗り越え方④評価の方法 (辻)
- 全体会議までに問いを考えることとしたい。(芝原)
- 全体会議では、円卓会議のたたき台、具体的な問いは全体会議の際に委員間で議論して出していきたい。(北川)
- 全体会議から円卓会議までの間で、ヒント集のたたき台、会議に集まってもらう方の検討をする勉強会をしたい。(谷口)

次回勉強会は、1月30日(木) 10時～12時@中京区役所4階第3会議室

○ 冊子構成案

➤表紙	・・・ 1
➤協働のメリット	・・・ 2～3
➤はじめる前に	・・・ 4～5
➤計画段階	・・・ 6～7
➤実施段階	・・・ 8～9
➤終わり方 評価段階	・・・ 10
➤終わってから 評価段階	・・・ 11
➤裏表紙	・・・ 12

○ ヒアリング結果まとめ

1 出会い・スタート～安心してスタートするために～

（1）地道に徐々に日頃から

- ・学生，NPO等への信頼の低さ
- ・他所からの話は保守的に対応が当たり前
- ・足しげく相手のもとに通い，相手をよく知る。
- ・相互理解を深める時間が大切
- ・ローマは一日にしてならず
- ・ファーストコンタクトは組織より個人が良い？
- ・日頃の付き合いの延長からスタート
- ・1，2，3年目と徐々に協働を深めた。

（2）マナー

- ・最低限のビジネスマナーを守る（服装・身だしなみ・言葉）

（3）相互理解（2（5）とつながる）

- ・立場，組織文化の違いを理解するための時間を惜しまない。
- ・相手の負担を少なくする配慮が必要
- ・相手の組織文化に合わせたファーストコンタクト
- ・相手へのイメージーション（意思決定の仕組，限界）→具体的な提案
- ・お金の負担がないと進めやすい。
- ・お金を請求すると企業に去られるのではないか。

（4）理想・目標・将来像

- ・相互のニーズが合致したことでスムーズなスタート
- ・大きな目標を共有しよう。
- ・どこまで目指すのかを相互確認をはじめにしておく。

（5）リスクを小さく

- ・とりあえずはじめてみる。
- ・課題認識共有できる人とはじめる。
- ・イベントにより起こる地域の不協和音

2 準備計画

(1) 目標共有に一定の時間をかけることが大事

- ・顔を突き合わせて話すことが信頼につながる。
- ・目標の共有の時間を惜しんではいけない。
- ・焦らず，でも無駄に時間を掛けず。
- ・フィードバック，キャッチボール
- ・NPOの目標に理解を！！

(2) はじめの段階で大枠を確認

- ・全体計画の見える化
- ・事業の枠組みを提示する。
- ・お金は誰が出すのかを明確にしておいたほうがよい。

(3) 違いを把握し，役割分担

- ・無理のない範囲で資源を持ち寄る。
 - ・違いを認める。
- 
- 役割の明確化

(4) 学生の特徴・リスクを把握する

- ・学生のコミットメントを高める工夫が大切
- ・学生を巻き込むリスク

(5) 第三者翻訳係の存在

- ・第三者的，相談役的な人がいるとうまくいく。
- ・中間組織翻訳係として機能

(6) 協働相手が進めやすいように考える（１（３）とつながる）

- ・「安心」をこちらからプレゼントで信頼感一層UP！
- ・お互いの意義を説明できるようにする。
- ・相手の組織決定を楽にしてあげる武器（理屈）を一緒に考える！
- ・協働相手の事情に巻き込まれる。

(7) 組織内の調整は組織内の言語価値観を用いる

- ・まずは組織内の意思統一
- ・組織内の問題を解決してから手をつなごう。
- ・本業，専門性を活かせる活動
- ・本業との関わり 社内の説得
- ・継続性が期待できる（企業のメリット）

(8) 窓口の人の覚悟を支える

- ・窓口の人を一人にしない！サポーター：相談役，つなぎ役：翻訳者
- ・窓口担当者の覚悟

(9) その他

- ・協働にはある程度しっかりとした事務局が必要
- ・やめる勇気

3 実施段階

(1) 一般ルール

- ・それぞれの団体での仕事の進め方を知っておく
- ・スピードの違いを理解する。
- ・確認事項を紙に残す。
- ・じかに会って交流すると誤解が少ない。
- ・オリジナルルールをつくる。(連絡方法等)

(2) リスクを想定しておく

- ・ボランティアなので事業が進まなくなること。
- ・協働先ではないところからのトラブル (音量/交通)
- ・大学, 企業, NPOと目標が変化
- ・人間関係トラブル
- ・取捨選択あきらめる部分も出てくる。

(3) 目的, 目標共有 お客様にしない

- ・外注するとお客様感覚になる。営業から関わる。
- ・学生にはイベントの重要性を説いて参加してもらう。

(4) フィードバック, モチベーション

- ・支援者に当事者の声を伝える
- ・第三者評価をうまく使う。
- ・新聞, TVなどメディア登場して理解者を増やす。

(5) コア組織, コアメンバー

- ・コーディネーターは黒子たれ。
- ・信頼を壊さない。納期を守る大切さ。
- ・クイックレスポンス, アンサーできなくともレスポンスはする。
- ・組織内部に協働相手の状況の説明をする。

4 終了, 評価

(1) 苦勞, 喜びを分かち合おう

- ・苦勞や喜びを分かち合う場を作ろう (打ち上げ)

(2) 皆にメリットが生まれる取組 協働のメリットって?

- ・手柄を独占しない
- ・お互いのメリットを作る。

(3) クレームは宝

- ・クレームから新しい協働先を探す。

(4) 振返りをしっかり, 共有して次へ 次のプロジェクトにつながる評価って?

- ・事業内容をしっかり話し合う。
- ・意外なところにメリットあり。
- ・継続性をどう確保するか (スキーム, 引継ぎ)。

5 その他, 全般

(1) 連絡方法のルール化

- ・働き方の違いによる連絡体制の構築
- ・連絡の取り方を工夫する (特に緊急のとき)。

(2) 信頼の築き方

- ・地域住民と人間関係を作る。
- ・地域との約束, 期限を守る。
- ・約束を守らないことは論外→利用しただけ?
- ・意欲・やる気を持続させる相手への配慮

(3) 人・キーパーソン

- ・キーパーソンは大事だが, 担当者は代わるので, 継続するための備えを。
- ・巻き込まれ学生の見学
- ・通訳・翻訳する人が必要

(4) 相談役の必要性

- ・第三者→相談役, 評価者
- ・メンターの役割
- ・協働事例→あり方の評価, クレーム受け止め

(5) いつまでお付き合いするのか

- ・いつまで協働するのかの認識がズレていると信頼関係にヒビが入ることも。事前に共有 (できる?)

(6) 組織内の意思統一を

- ・団体内の意識を統一させておく必要がある。
- ・組織内部に情報を伝える工夫を。